

# 英訳処理の過程で施される数量・範囲・程度の指定について

荒瀬 美沙子

## 1. はじめに

同一の事柄，状況に言及するとき，言語化される範囲は言語によって違ってくる。日本語と英語では，日本語の方が，コンテキスト依存度，推論依存度が高い分，言語化される範囲が少なく，そのため言語表現そのものの自立性が低い。裏返していえば，英語の方が明示的情報量が多いわけだが，言語使用の背景にあるどんな要素が日本語では表現する必要がなくて，英語では表現する必要があるのだろうか。この違いが日英語間の翻訳にどのように影響しているのだろうか。

小論では，日本語小説が英訳される時，数量，範囲，程度に関して何が何のために加訳<sup>1)</sup>されるのか，文を超えた談話という単位で検証し，そこから見えてくるものを通して，日英語の表現性，言語化パタンの相違の一端を探りたい。

## 2. 数量情報の明示

ここでは英語訳で数量情報が加訳されている例について考察する。(1)では，「目玉焼きを作り」のところがfried a couple eggs sunnyside-up (卵2個を目玉焼きにし)と訳されているが，これは，目玉焼きにした卵は具体的に存在したわけだから，ゼロ限定詞で単にeggsとするのが不自然だからである。そこで原文では指定されていない焼く卵の数に対して，若い男性が朝食に食べるのに常識的な数a coupleが指定されているのである。

(1) a. フライパンにバターを敷いて目玉焼きを作り，(村上春樹1985:下142)<sup>2)</sup>

b. I coated a frying pan with butter, fried a couple eggs sunnyside-up. (Birnbbaum 1989-a:246)

次の(2)では「チョコレートが半分」の部分がhalf a bar of chocolateと訳されている。この場合，「チョコレート」を単にchocolateとしてしまうと「半分」を指定することができないため，まず，a bar ofでチョコレートを定量化し，その「半分」をhalfで指定している(half of chocolateは文法的に成り立たない，また，half (of) the chocolateは文法的には可能だが，ここでは文脈にそぐわない)。一方，ロードマップは複数形，タオルは単数形に訳されているが，実際，著者がそれぞれについて，複数をイメージしたのか，単数をイメージしたのかは，発話場面の状況，前後の文脈を見ても定かではない。英語の加算名詞はその指示物が単数であるか複

数であるか分からないと表現できないため、数に鈍感な日本語を数に敏感な英語に移し換えるときの宿命として、原文の表現自体からしか数の特定ができない場合、結局のところ訳者の勘に頼らざるを得ない。

- ( 2 ) a. 車の中にはたいしたものは何もなかった。ロードマップとタオルとチョコレートが半分あるだけだ。(村上春樹 1985:下 145)
- b. There was nothing noteworthy---road maps, a towel, half a bar of chocolate. ( Birnbaum 1989-a:247- 8 )

下の( 3 )( 4 )で「お茶、ほしいわ」「コーヒーでも入れてあげるわ」の tea, coffee にそれぞれ不定限定詞の some が加訳されているが、この some は不定であるが限られた量を表している。巻下( 1997:75-6 )は、「some の添加によって量的指定がなされ、修飾されるモノの存在が肯定されるばかりでなく、そのモノが具体性、現実味を帯びてくる」としているが、確かに、両方の例で話者は tea, coffee の具体的なイメージを思い浮かべて発話していると思われる。実際に飲むことを想定しているのである。一方、( 3 )の「自分で茶を淹れようとはしなかった」の「茶」はゼロ限定詞で単に tea となっているが、この場合、「茶を淹れる」行為をいつているためゼロ限定詞となっている。( 5 )の「コーヒーを頼んでも返事しない」の coffee もゼロ限定詞である。茶やコーヒー、ビール、牛乳、水など、日常生活で消費される物質名詞はしばしばゼロ限定詞で使用されるが、Declerck ( 1991:323 )によると、ゼロ限定詞を用いた場合、話者はその名詞( 句 )によって指し示されたもの一般を想定しているという。また、普通名詞、物質名詞、抽象名詞が本来の意味ではなく、一連の動作、目的を表す場合、抽象的な意味をもつようになりゼロ限定詞で使用されるが、物質名詞 coffee に関する、こういった例が( 6 )である<sup>3)</sup>。コーヒーという物質を指すのではなく、コーヒーを飲むという目的と行為、そして、コーヒーが飲める空間でリラックスするという一連の動作を、ここの coffee は意味している。その他、お茶やコーヒーに関する加訳には、( 7 )のように、具体的に飲み物として容器で数えた a cup of などよく見られる。また、一定の容器に入った形のあるものとしてとらえ、それを a/one coffee, two coffees などと数えることもよくある。いずれの例でも日本語の原文では単に「(お)茶」「コーヒー」となっている。今回データ・ソースとした中には見られなかったが、ゼロ限定詞の場合は、上に挙げた用法の他に、総称的な意味をもつ場合もある。

- ( 3 ) a. 「お茶、ほしいわ」 叡子はそういつてから、七瀬に何やかやと話しかけてきた。 <省略> 彼女は、自分で茶を淹れようとはしなかった。母に茶を淹れさせることを、なんとも思っていない、 <省略><sup>4)</sup> ( 筒井 1975:14 )
- b. “I want some tea,” said Eiko, who then started making small talk with Nanase. <omitted> She made no attempt to get herself tea. She didn’t think twice about having her mother make it for her. <omitted> ( Kabat 1989:14 )
- ( 4 ) a. 「 <省略> リュウ、あなたコーヒーでも入れてあげるわ」 ( 村上 龍 1978:131 )
- b. “ <omitted> Ryu, I’ll make some coffee for you.” ( Andrew 1977:153 )

- ( 5 ) a. レイ子はコーヒーを頼んでも返事しない。( 村上 龍 1978:126 )  
b. Reiko didn't answer when we asked for coffee. ( Andrew 1977:147 )
- ( 6 ) a. 我々は前と同じように街を歩き、どこかの店に入ってコーヒーを飲み、また歩き、  
<省略> ( 村上春樹 1991:上 50 )  
b. We walked the same streets as before, stopped off for coffee somewhere, walked some  
more, <omitted> ( Birnbaum 1989-b:I 51 )
- ( 7 ) a. 「さっき急に出て来ると言って……。たぶんお茶でも飲みに行ったんじゃないですか」  
( 赤川 1985:129 )  
b. “She hurried out a moment ago, probably for a cup of tea.” ( Frew 1985:107 )

someに戻って、もう一例、量の加訳について考察する。次例( 8 )は、実際によくあったことの回想場面での一文であるが、someは実際に何らかの具体的な話を引き出したことを含意している。また、someの場合、指示は不定であるが、量は限定されることから、言及されている量と言及されていない残りの部分とが対比されているという印象を与えることがあるという( Declerck 1991: 300 )。( 8 )でいうと、上手く引き出した以外の話の存在を暗示していることになる。

- ( 8 ) a. どちらかが長く黙っているとそちらにしゃべりかけて相手の話を上手くひきだした。  
( 村上春樹 1991:上 43 )  
b. If either of us fell silent for too long, he'd turn on the conversation and draw some talk  
out of us. ( Birnbaum 1989-b:I 44 )

こういったsomeに似たような例で、( 9 )のようなものがある。火事のひっ迫した場面からの引用であるが、日本語の原文では単に「煙」となっているのに対し、英語ではa lungful of smoke (煙を肺いっぱい)と吸い込んだ煙の量が指定されている。量を明確に指定せずとも、火事場の煙であることと、吸い込んだ煙の量は「むせる」に至るほどの量であるということ容易に推測できるが、英語訳ではa lungful ofで量が指定されている。この指定によって、物質名詞smokeが具体性をもつようになり、量的に区切られた一つの存在になっている。

- ( 9 ) a. ベッドから這い出すと、煙を吸ってむせた。( 赤川 1985: 7 )  
b. She scrawled out of bed, but inhaled a lungful of smoke and fell back choking. ( Frew 1985: 9 )

次に、数量指定についてやや別の角度から考えてみる。( 10 )は、日本語の原文ではどのくらいの量のビールを持ち込んだかは不明であるが、それでも何ら不足感はない。一方、英語訳ではa six-packを缶ビールの訳語として用いることにより持ち込んだ量が具体的になっているが、これは、(数量に関する)情報があいまいになることを嫌う英語の特性に起因するというよりもむしろ、若い女の子が缶ビールを部屋に持ち込み、やけ酒を飲むというスキーマ( = 特定の概

念を表象するための構造化された知識の集合)の再構築を意図したからである。6本パックのビール(缶や瓶ビールが6本1パックで手軽に上げられる形で売られている)を気軽に引っ掛けて友達を訪問するスキーマが日本語の原文の喚起するものとうまく重なっている。スピーチレベルやリズム, テンポの保存にも成功している。翻訳する際, 言葉を日本語から英語に首尾良く移し換えるだけでは不十分で, 日英語で同じスキーマを構築することが大事となってくる。また, 言葉には指示的意味と情緒的意味という二つの側面がある(浮田・賀集 1997:31-2)が, 「缶ビール」と a six-pack の指示的意味, 情緒的意味(手軽でスカッとウマイというイメージ)の適合が絶妙である。

(10) a. 私の目の前で, カズミが泣いている。彼女の部屋。こっそりと缶ビールなんか持ち込んで, やけ酒というものをやってみようと, 彼女は提案したのだけれど, 半分も飲まない内に彼女は泣き出した。(山田 1992:94)

b. Kazumi was crying right in front of me. In her room. At her suggestion I had sneaked in a six-pack so she could drown her sorrows. Before we had got through half of it, she was already crying. (Johnson 1992:87)

### 3. 範囲, 程度の指定

下に挙げた(11)~(19)に見られるように, really, exact(ly), probably, all, only, absolutely, almost, perfectly, just, at all等々, 明示的情報の精度を上げるために追加したと思われる形容詞, 副詞が数多く見つかった。(11)~(19)の加訳は, いずれも, 日本語では明示されていない含意を, 英語訳では表層に出している例である。(11)は脅迫の場面での台詞だが, reallyで「本当にそう思っているのか」という呆れや意外性, それから突き放した感じがうまく表現されている。(12)では, 日本語では含意にとどめられている「すっかり」という程度が, 英語訳ではallで明示されている。(13)のexact, (14)のexactlyも同様の程度の加訳である。(15)では, 日本語の原文では明示されていないが, 英語訳ではfullによりこうこうと明かりが点いているさまが表現されている。(16)のjustは「(正確にいうと)単に~にすぎない」という意味で使われているが, このjustには聞き手の気持ちを軽くするための話者の気遣いが隠されている。一方, (17)のjustには「(二時になって)やっと」起きてきたという含意がある。(16)(17)では, 原文の含意が, 加訳されたjustにより再び含意という形で受け継がれている。(18)のprobablyは話者の心的態度を表すための加訳であり, これにより明示的情報の精度が増している。(19)のabsolutelyは加訳がスタイルを継承する効果を生むことがあるという例である。女性は男性に比べて強意語や誇張表現を好むといわれるが, absolutelyの使用で女性の発話らしさがよく出ている。

(11) a. 「そんなことができると思ってるのかい, 奥さん」(赤川 1985:106)

b. “Do you really think you can manage that?” (Frew 1985:89)

(12) a. 夕里子は息を呑んだ。 忘れていた!あの電話だ! (赤川 1985:100)

- b. Yuriko gasped. She had forgotten all about that telephone call! ( Frew 1985:85 )
- (13) a. クラブの女にいうような口調 ( 筒井 1975:13 )  
b. the exact tone he'd use with club hostesses ( Kabat 1989:13 )
- (14) a. 「 <省略> でもそれが何処にあるかは誰にもわからないの <省略> 」 ( 村上春樹 1991: 上 13 )  
b. “<omitted> Though no one knows exactly where it is. <omitted>” ( Birnbaum 1989-b:I 13 )
- (15) a. 片瀬家には、まだ明かりが点いている。( 赤川 1985:115 )  
b. The lights were turned on full at the Katase house, ( Frew 1985:97 )
- (16) a. 何だ自殺したの？まあ死ななかつたから未遂だなあ、( 村上 龍 1978:124 )  
b. “A suicide, is it? Well, since you're not dead it's just attempted suicide, ( Andrew 1977:144 )
- (17) a. 潤一は、二時前に起きてきて、( 筒井 1975:17 )  
b. Junichi woke up just before two ( Kabat 1989:18 )
- (18) a. あなたの言ったとおりね。( 村上春樹 1985:下 14 )  
b. “You're probably right,” ( Birnbaum 1989-a:162 )
- (19) a. 「 <省略> そしてこうしてあなたにくっついている限り、私も井戸には落ちないの 」 ( 村上春樹 1991:上 14 )  
b. “<omitted> And so long as I stick with you, I'll absolutely never fall in either.” ( Birnbaum 1989-b:I 14 )

(20) では、冗漫ともとれる説明 *leaving him a day and a half to himself* ( 一日半、自由に使える ) が加訳されている。日本語の原文では、作中人物の心の内がテンポの良い描写の現在 ( 物語の現在 ) で表現され、読者が感情移入し共時体験しやすいよう工夫されている。そのため、一日半、時間が空くことに容易に思いがいく。ところが、英語訳の方は単純過去形で淡々と描写されるにとどまっており、一日半、時間が空くことに気づきにくい。これを是正するのが加訳部分である。英語にも描写の現在の用法はあるが、描写の現在と単純過去の間を自在に行ったり来たりできる日本語ほど器用にどこにでも使えるわけではなく、描写の視点をまず定め、後続文で、その描写の視点を代名詞で追うような形をとる等々、ある意味、制約ともとれるような工夫が必要となる。そのためか、日本語の原文に描写の現在が使われている部分でも、英語に訳される際は描写の現在の形をとらないことの方がはるかに多い。never just one ( 決して一人では ) が加訳されている (21) も同様の例であるが、ここでも英語訳には描写の現在は用いられていない。

- (20) a. 出張といっても、仕事は簡単なもので、午前中一杯もあれば楽に片付けられる。この機会を逃す手はない！　すでに五年来、愛人関係にある長田洋子と、二人の旅を楽しむつもりだったのである。( 赤川 1985:189 )  
b. Even though it was for business, he would be able to finish his work on the first morning, leaving him a day and a half to himself. It was a chance not to be missed, and

he planned to spend his free time enjoying the trip with his mistress of five years, Yoko Osada. (Johnson 1992:152)

- (21) a. 女の子たちは、大抵、二、三人で彼の所に来るから、とても強気だ。(山田 1992:29)  
b. The girls would usually gang up on him two or three at a time, never just one, so they were a force to be reckoned with. (Johnson 1992:28)

程度の加訳には次のようなものもある。(22)の a bit of は表現をやわらげる機能を果たしている。日本語の方が自分の主張を言い切ることを避けることが多く、終止形の代わりに連体形や中断形を使うなどして表現をぼかしたり、冗語を多用したりする。そして、英語から日本語への翻訳ではこういった冗語が減訳されることが多いのだが、逆に、(22)のように、日本語から英語への翻訳で表現をぼかすための加訳がされることもそう珍しくはないようである。(23)では、話者の見知らぬ北の街にはるばるやってきた心細さ、不安が加訳部分 the two of us によく出ている。

- (22) a. 「ええ、急ぐんです」(赤川 1985:133)  
b. “Yes, I’m in a bit of a hurry.” (Frew 1985:110)  
(23) a. 「私たち、本当に正しい街にいるの？」と彼女が訊ねた。(村上春樹 1985:下 15)  
b. “Are we really in the right city, the two of us?” she asked. (Birnbaum 1989-a:162)

#### 4. 比較級の使用による数量、範囲、程度の指定

ここでは、英語訳に比較級を使用することにより数量、範囲、程度の指定をしている例について考察する。

日本語の形容詞、副詞に比較級はないが、最近では、もともとは本来の日本語の用法から逸脱した用法であったはずの(24)のような表現が不自然ではなくなっている。『広辞苑 第五版』にもこういった「さらに」「いっそう」を意味する副詞の「より」について、「ヨーロッパ語の形容詞比較級の翻訳として助詞「より」から転じた語」とあるように、「より」は、本来、英語でいうならば‘than’に対応する助詞であったものが、比較表現でありながら‘than’以下を欠く文の訳語として定着したものである。

- (24) a. そのためには、久国と潤一の間の疑惑と敵意を、より深めなければならない。(筒井 1975:24)  
b. In order to do so, she’ll have to further provoke their hostility and suspicions. (Kabat 1989:26)

英語の訳語に比較級が使用されている箇所から反対に日本語の原文をたどってみると、上のような助詞から転じた副詞の「より」や「さらに」「いっそう」「ますます」「もっと」「その上に」「ずっと」「～以上の」等々の比較を示す表現が使われていない例が多数見つかった。日本

語の原文にこういった比較マーカーが使われておらず、さらに比較の対象も明示されていない例について考察したい。例(25)～(29)では、英語の訳語に比較級を使用することによって程度の指定/指定変更がされている。(25)では、発話者はこの発話の時点では相手のことをほとんど知らない。この文脈で日本語の原文に「もっと」を加えて「まずあなたのことをもっと知りたいな」とすると違和感があるのだが、英訳ではmoreが使われている。確かに、ほとんど知らないとはいえ、名前と職業くらいは知っているわけで、そこからスタートして、もっと知りたいということで英語ではmoreが使われている。何も無いところを起点とするのか、充分ではないが少しはあるところを起点とするのか、その違いに敏感なのが英語のようである。同様の例が(26)(27)(28)である。(26)はバーの店主がビールをつぎ足してくれるときの発話であるから英語ではmore beerとなり、(27)では一般常識で考えて暗い夜道を歩くとき全く気を付けないことはあり得ないわけで、だから英語では少しは気を付けるところを起点として、「さらに気を付けなくちゃ」とbe more carefulとなっている。(28)も同様に、少しは考えているだろうけれども、もっと考えて欲しいということでa little more considerateとなっている。(29)では、心臓が突然早く打つようになったのではなく、少しずつ高鳴り、延いては「早鐘のように鳴り出した」という経過を考慮してfastではなくfasterが使われている。

(25) a. 「まずあなたのことを知りたいな」(村上春樹1985:上61)

b. “First, I want to know more about you.” (Birnbaum 1989-a:34)

(26) a. <省略> 僕のグラスにビールを注いだ。(村上春樹1985:上143)

b. <omitted> poured more beer into my glass (Birnbaum 1989-a:90)

(27) a. 「この道、寂しいんだから、気を付けなくちゃ」(赤川1985:223)

b. “This road is so deserted. You must be more careful.” (Frew 1985:179)

(28) a. 「<省略>それから柔道だかなんだかわからないけれどいつもお宅はうるさいね。すこし考えなさいよあんた」(椎名1989:138)

b. “<omitted> And by the way, I don’t know whether you’re doing judo or whatever, but you’re always making a racket at your place. Try being a little more considerate of others!” (Schodt 1991:125)

(29) a. 夕里子の心臓が早鐘のように鳴り出した。(赤川1985:82)

b. Yuriko felt her heart beating faster (Frew 1985:71)

これまで見てきた例では、述べられている事象の起点や推移から判断して、比較の対象がその前段階であることが類推できたが、次に挙げる例では、いずれも前後の文脈からも比較の対象は見えてこない。日本語の原文に比較の含意がないところで、訳文に比較級を使って、表現の程度を指定/指定変更している例である。(30)では、原文の「散々」がmore than I can repay(お返しもできないほどのことをしてもらっている)と訳され、情報量が増す結果となっている。(31)では、「違っていた」に対して、he couldn’t have been more wrong(これ以上の間違いはなかった)と訳されており、一見、間違いの程度が増しているように見えるが、直後に「その逆だったのである」と続いているので、英語訳のほうがいち早くより精度の高い情報

を提示した結果となっている。(32)では「思いやりが足りなかった」という日本語が *should have been more sympathetic* (もっと思いやっていたらよかった) と英訳されているが、ここでは、日本語と英語で物事を見る方向が逆になっている。すなわち、日本語の原文では実際の不足分を嘆いているのに対し、英語の訳文では足せなかったことを嘆いている。(33)では、訳文中で比較級を用いることによって「いい思い」の内訳が具体的に示されている。

- (30) a. 「<省略> 散々お世話になってんのにさ」(赤川 1985:73)  
 b. “<omitted> They are already doing more than I can repay.” (Frew 1985:64)
- (31) a. <省略> それは違っていた。その逆だったのである。(椎名 1989:106)  
 b. <omitted> he couldn't have been more wrong. It was the other way around. (Schodt 1991:92)
- (32) a. 「いや、あんたのせいじゃないよ。私に紀子への思いやりが足りなかったんだ」(赤川 1985:118)  
 b. “No, it's not your fault. I should have been more sympathetic.” (Frew 1985:99)
- (33) a. 「佐々本さんの働きでずいぶんいい思いしてるくせに」(赤川 1985:62)  
 b. “You have had more than your share of praise for work done by Mr. Sasamoto until now.” (Frew 1985:54)

## 5 . おわりに

文化の違いに起因するものではなく、原文の語彙と使われた訳語の意味範囲の相違を補うためのものでもない、そんな加訳について、数量、範囲、程度に加訳に焦点をしばって考察した。一つの対象を捉えるのに、英語では一定量と不定量、特定と不特定、単数と複数、全体と部分、部分と残部を対立させるが、日本語ではこういった情報は、数量詞や指示詞が付与されたりする特別の場合を除いて、表層に明示されることなく、一様に表現される。英語訳に見られる数量に関する加訳の考察から、指示対象に具体性があるのかどうか、指示対象を表す言葉が本来の意味で使われているのか、それとも本来の意味を失い関連する動作や目的を表しているのか、表層に表れた意味ではなく本当は何を伝えたいのか、言及されている部分と残りの部分の対比関係があるのかどうか、そういった情報が読めた。また、スキーマの再構築に数量情報の加訳が功を奏している例もあった。範囲、程度に加訳に関しては、原文の含意を表層に出す役目をしているもの、含意されている事象に関して情報としての精度を上げ、さらに別の形でその含意を表す機能を果たしているもの、表現スタイルを継承する機能を果たすもの、原文と訳文が採った表現技法の違いから来るひずみを埋めるために機能するもの、談話機能に関わるもの、話者の心的態度に関わるものなどがあった。比較級の使用により数量、範囲、程度が指定されている例についても考察した。日本語の原文に比較の意図が出ていない例について検証したが、訳文における、こういった箇所での比較級の使用は、主に日英語の事象の捉え方の違い、すなわち、推移する事象の起点をどこに置いて表現するかということで説明がついた。比較の意図だけでなく、比較の対象すら前後の文脈をたどっても見えない例についても考察した。こうい

った例では、英語訳の方が情報量が増す結果となっていることが多いようである。

翻訳のプロセス、すなわち、一つの言語システムから別の言語システムに形式と内容に移す処理の過程で、訳者は原文の表現や指示的意味を吟味し、二言語間の指示内容を一致させ、スキーマがうまく再構築されているか確認し、文化の違いや連想を伴う含意にまで気を配り、スピーチレベルや文体、そして可能な限り韻律効果の保存にも配慮する。そういった多角的な作業の結果生まれた訳文を逆にたどっていくことで見えてくるものは実に様々である。

## 注

- 1) 原文にないものを追加して訳すことを「加訳」、原文の一部を訳出しないことを「減訳」という。
- 2) 用例中の下線はすべて筆者による。数量、範囲、程度の指定部分等、議論の箇所に下線を施した。(赤川 1985: 7)(Frew 1985: 9)等は使用データの出处を示す。
- 3) よく知られた普通名詞のこういった例に、建物、施設としてのschoolではなく、School begins in September.やSchool is over.等に見られる(制度としての)学校教育や学校内で教育を受けるという目的や動作を表す無冠詞のschoolがある。
- 4) 途中、引用を省略した場合は、その部分に<省略>、<omitted>と記した。

## 使用データリスト

- 赤川次郎. 1985. 『三姉妹探偵団』講談社文庫.
- Frew, Gavin, trans. 1985. *Three Sisters Investigate*, by Jiro Akagawa. Tokyo: Kodansha International.
- 村上春樹. 1985. 『羊をめぐる冒険 上・下』講談社文庫.
- Birnbaum, Alfred. 1989-a. *A Wild Sheep Chase*, by Haruki Murakami. Tokyo: Kodansha International.
- 村上春樹. 1991. 『ノルウェイの森 上・下』講談社文庫.
- Birnbaum, Alfred. 1989-b. *Norwegian Wood I・II*, by Haruki Murakami. Tokyo: Kodansha International.
- 村上 龍. 1978. 『限りなく透明に近いブルー』講談社文庫.
- Andrew, Nancy. 1977. *Almost Transparent Blue*, by Ryu Murakami. Tokyo: Kodansha International.
- 椎名 誠. 1989. 『岳物語』集英社文庫.
- Schodt, Frederik L, trans. 1991. *Gaku Stories*, by Makoto Shiina. Tokyo: Kodansha International.
- 筒井康隆. 1975. 『家族八景』新潮文庫.
- Kabat, Adam. 1989. *Portraits of Eight Families*, by Yasutaka Tsutsui. Tokyo: Kodansha International.
- 山田詠美. 1992. 『放課後の音符<sup>キイノート</sup>』角川文庫.
- Johnson, Sonya L. 1992. *After School Keynotes*, by Amy Yamada. Tokyo: Kodansha International.

## 参考文献

- Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
- 平子義雄. 1999. 『翻訳の原理：異文化をどう訳すか』大修館書店.
- 熊山晶久. 1985. 『用例中心 英語冠詞用法辞典』大修館書店.
- 巻下吉夫. 1997. 「翻訳にみる発想と論理」『文化と発想とレトリック』日英語比較選書 1. 研究社出版.
- 成瀬武史. 1996. 『英日・日英翻訳入門：原文の解釈から訳文の構想まで』研究社出版.

- 織田 稔. 2002. 『英語冠詞の世界：英語の「もの」の見方と示し方』 研究社 .
- 大堀壽夫 編. 2004. 『認知コミュニケーション論』 シリーズ認知言語学入門 第 6 巻 . 大修館書店 .
- 新村 出 編. 1998 . 『広辞苑 第五版』 岩波書店 .
- 辻 幸夫 編. 2001. 『ことばの認知科学事典』 大修館書店 .
- 浮田 潤, 賀集 寛. 1997. 『言語と記憶』 現代の心理学シリーズ 5 . 培風館 .
- Wales, Katie. 1989. *A Dictionary of Stylistics*. Longman.
- 八木克正. 1999. 『英語の文法と語法：意味からのアプローチ』 研究社出版 .